

評価受け文化庁長官に

文人の 武蔵野

三浦朱門（1926〜2017年）は、いわゆる文学史においては「第三の新人」と呼ばれる作家の一群に属します。「第三の新人」の作家たちは、戦時下に青春を送り、厭戦的^{けんせんてき}の気質が強く、イデオロギーや政治的主張に対して強い警戒感を持ち、「小市民的」などとも評されます。ユーモアを好み、私小説や無頼派の伝統を引き継ぐ傾向もあるで

三浦朱門 ⑧



文化庁長官をひき受けた頃の三浦朱門（1985年撮影）

しょうか。

遠藤周作、安岡章太郎、吉行淳之介、庄野潤三らが特に「第三の新人」と呼ばれ、三浦もそこに含まれます。文学史上の用語というよりは便宜的

なもので、ひとりひとり個性が違う作家であることはもちろんなのですが、あらためて「第三の新人」の中に三浦を置いてみると一つの特徴が浮かびあがります。

がりました。他方で、同じ頃には大学の教壇に立ち、やがて専任の教員となり、大学紛争に抗して退職する69年まで務め、多くの大学小説も発表しました。

「画鬼」（のちに「冥府山水図」）や「ボナペ島」で文学的に出発した1950年代においては、芥川龍之介や中島敦の作風を引き継ぐところ

専業作家になってからも、70年の大阪万博でキリスト教館のプロデュースをしたり、遠藤らと日本キリスト教芸術センターを創設したり、東南アジアを訪問したりと、旺盛に文化芸術上の活動をおこなう面がありました。

歳年でした。芥川も中島も、実業を眺みつつ芸術を重んじる実務にも長けたところのある芸術家だったと思われませんが、30代半ばまでに亡くなっています。武蔵野の文人でしたが、武蔵野を舞台にした小説を書かずに逝きました。

三浦は、武蔵野を描いた小説で文学的評価を得、それきっかけにして行政の仕事にも従事することになるのでした。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

81年、転機が訪れます。短編小説「武蔵野インディアン」を発表し、翌年には国語審議会委員になります。83年に連作短編集「武蔵野インディアン」で第33回芸術選奨文部大臣賞を受賞し、85年に三浦は文化庁長官に就任します。59

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。